

変わる海、変わる生活

橘川 俊忠（非文字資料研究センター 研究員）

8月に3回目の対馬調査を実施した。その調査で、対馬南端の集落豆酩を訪れた。豆酩も3回目である。前2回は、1泊、2泊の短い調査だったので、豆酩の景観を見たり、天道山に登ったり、周辺を含めた古跡を回り、豆酩の概要を把握するにとどまった。3回目の調査では、定宿となった民宿美女塚茶屋のご主人の紹介で、ご主人の叔母にあたる山下久子さんにお話をうかがうことにした。

山下さんは、今年81歳、九学会の対馬調査が行われた当時は、20歳前後で、調査の目的である九学会調査以後の対馬における「持続と変容」の様子をお聞きするには最適の方であった。豆酩生れの豆酩育ちの山下さんは、今でも補助電気モーター付自転車で山の畑に毎日通っているほどお元気で、港近くの自宅に一人で暮らされている。その自宅は、大分改築されているが、百年ほど前に建てられた構造を残しているお宅で、黒光りする大黒柱に歴史を刻んだ風情を漂わせていた。山下さんは、最近では、対馬はおろか豆酩からも出かけることはほとんどないそうである。豆酩に生まれ、豆酩に育ち、豆酩に暮らしていることをごく自然に受け入れているように感じられた。

そんな山下さんから、3時間近くお話を聞くことができた。そのお話の中から、今回は海と生活の変化についてお聞きしたことを紹介しよう。



写真1 山下久子さん宅にて

豆酩の海は、東南に向かって開けた湾で、北東側と南西側を下部が岩礁帯となっている緑の岬に囲まれ、その間に半弓状に海岸が広がる美しい海である。今は、海岸の北東側の半分はコンクリートの護岸に覆われた立派な港になっており、南西側の半分は砂浜が残っているという状態である。また、湾口部には船の出入り口を残して湾全体に4重の防波堤が設置され、湾内の岬の下部の岩礁もコンクリートの護岸で覆われている。湾岸沿いには舗装道路が通され、人家はその道路によって海岸から隔てられている。山下さんの話では、かつては湾全体が砂浜で、海岸と人家の間には松林があったというが、その面影は、いまはまったくない。

豆酩の海岸が、そんな風に姿を変えたのは、豆酩が対馬南西部の最大の集落であり、漁業基地として整備する必要性があったという事情が要因としてもっとも大きかったとは推測されるが、その問題はここではこれ以上触れない。

山下さんによれば、かつて豆酩の海岸は、砂浜が続き、その岸辺は松林、その陸側に小屋（倉）が立ち並び、その奥に住居があったという。そのころ、砂浜では地引網が引かれ、その日の食用に十分な魚が獲れた。地引網は、対馬でも、網を引く者には、獲れた魚は必ず分配されたという。これは全国各地と同じであった。食卓には、そうして得た魚と自分で作った野菜などが並んだ。だから、おかずを買うことはほとんどなかった。豆酩の海には、魚が豊富で、魚種も量も不足することはなかったという。

豆酩の海が与えてくれるものはそれだけではなかった。磯には、アワビ、サザエなどの貝類も多く、わかめ、ひじき、ふのりなどの海藻類も豊富に採れた。山下さんは、海に入るのがあまり得意ではなかったのですが、もっぱら海藻類の採取をしていたということだが、それでも海の口開けからの一シーズンで30万から40万円の稼ぎになったという。昭和30年代から40年代ころの話だというから、現在の貨幣価値では100万円以上の現金収入

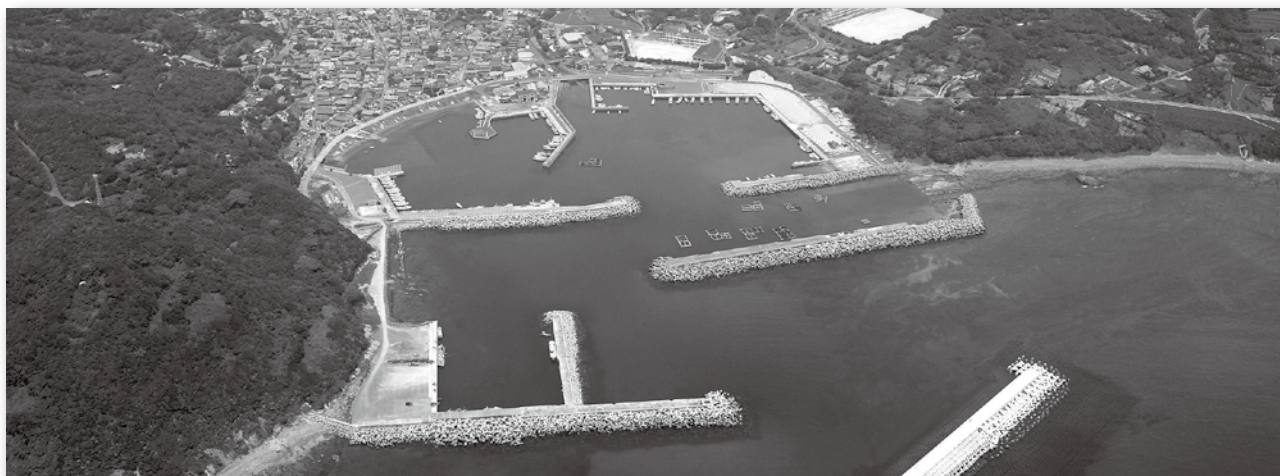


写真2 豆酩湾全景（長崎県対馬地方局提供）

を得ていたことになる。今でも働き者という評判をとっている山下さんのことだから、村の稼ぎ頭だったかもしれないが、豆酩の磯は、女性の季節的労働によっても少なからぬ現金収入をもたらすほど豊かだったのである。

現在豆酩の海は、前述したようにその姿をまったく変えてしまった。港は整備され、南東から吹く風による波風の被害は軽減することができた。ある程度大型の漁船も係留することができるようになった。しかし、その代わりに失ったものも小さくない。磯や砂浜が消えたために、磯での稼ぎや地引網もできなくなってしまった。それだけではない。海中の藻場がなくなってしまったために、魚は繁殖場を失い、魚そのものが減少することになったのである。磯近くの漁は、すっかり姿を消してしまった。

そのためか、新しく築造された防波堤は、周辺に岩石を沈め、海藻類が繁茂できるようにネットを張り巡らしたタイプになっている。港には、豆酩漁港の整備状況を示す、写真パネル付の看板が建てられており、そこには誇らしげに新しいタイプの防波堤を建設する意図と計画図が表示されていた。魚に都合のよい環境を復元しようという努力はけっこうだが、公共工事で破壊したものを、別の公共工事で回復させるというのは、どこか矛盾しているようにも思われるし、なによりも公共工事シンドロームに陥っているのではないかと、心配になるところである。

しかし、もっと心配なのは、生活の自立性が失われたのではないかということである。自然と寄り添った自給によって支えられる部分が大きかった生活が、購入する物資による生活に変わることは、とにかく現金収入をどう得るかということを中心とした生活に変わることを意

味する。自給を中心とした生活が、馬を飼い、そのために朝早くから山に出かけ飼葉用の草を刈り、堆肥を作り、家事一切をこなす、田畑を耕す、磯稼ぎもする、今ではできる人も少なくなった重労働の上に成り立っていたことはまぎれもない事実であった。現在の都市生活に慣れた我々には、たいへんな苦勞をされていたように聞こえてしまう話を、山下さんは、実に楽しそうに話されていた。おそらく、そこには、自前で生活していたという自負があるのであろう。とくに、戦後米軍が対馬に基地を建設する際に、労働者として働きに出ることを敢えてしなかった若いころの山下さんの思いが、今も生き続けているように感じられた。

海を中心とした豆酩の生活は、海の変化とともに大きく変わった。漁業の柱であったブリの飼付け漁も、大手水産業者の参入によって豆酩の人々の関わり方を大きく変えた。磯や浜を漁場とする漁業も縮小の一途をたどっている。「高度成長」の大波は、豆酩にも例外なく押寄せ、高齢化と過疎に悩まされている状況は、公共事業依存の現状とともに深刻の度を増すばかりのように見える。もちろん、そんな深刻な問題に簡単に解決策が見つかるわけではない。しかし、この状況が作り出されたこの60年間に何がどう変わったのかをきちんと確認しておく必要はあろう。さらに、そのような変化にもかかわらず持続し続けているものを見出し、どんな小さなことであれ、豆酩の内部から状況を変えていく可能性を探ることが必要であろう。今回の調査では、何がどう変わったかをできるだけ詳細に記録し、記述することを課題とする段階にとどまらざるをえないが、問題意識としては、そのような問題を認識しつつ、調査を続けていきたい。